

烏蛇者、背有三稜、身烏如漆、有光、頭圓尾尖、眼有赤光、有劔脊、細尾者無劔脊、而尾稍粗者、俱能逐人而螫、亦能索纏、令苦、江東希有、西南多有、野人食之者多、言甘平無毒、予未試之、有滑蛇者、常在林下草澤之間、色黃黑、相間、喉下黃而腹白、不過二三尺餘、近丈者希有、惟近人家、繞田畝、竹林、園場之溝畔、而吞食蛙及鼠子、雀雛之類、而不害人、其毒亦少、故村野之兒童、追打為弄戲耳、有山醬者、紅黑節節相間、亦在林篁草澤、田畝園場之際、每吞食蛙及鼠子、雀雛之類、而不害人、有水蛇者、在山川野水中、大如鱧鱒、黃黑色、有纈紋、亦不害人、釣鱸者、儘得之、識者不食之、不識者混而炙食、亦中毒者少矣、大抵蛇類、春後出而秋後蟄、天寒則穴居于土中、脩繕隄塘之人、穿土見蛇之群、蟄遇寒不蠢、如繩之緊結、其大者深蟄、不識所有也、

〔日本書紀〕神代一書曰、伊弉諾尊、拔劔、斬軻、遇突智、為三段、中一段是為高竈、中竈此云於箇美、

〔古事記傳〕五淤加の意は、いまだ思得ず、美は龍蛇の類の稱なり、和名抄に水神又蛟を、和名美豆

知とある美、これなり、豆は例の之に通、知は尊稱、又蛇蛟などの美も此なり、又日讀の巳を美

と訓るも此意なるべし、さて此神を書紀に竈と書て、此云於箇美とあり、竈は、字書を考るに、龍

なり、通ふ、豊後國風土記に、球珠郡球覃郷、此村有泉、昔景行天皇行幸之時、奉膳之人、擬於御飯、令汲

泉水、即有蛇、簡美、於是天皇勅云、必將有見、莫令汲用、因斯名曰見泉、因為名、今謂球覃郷者、訛也、

略註、万葉二十二に、吾崗之於可美爾、言而令落雪之摧之、彼所爾塵家武、これらを思ふに、此神は

龍にて、雨を物する神なり、書紀に高竈と云もあり、そは山上なる龍神、この閼淤加美は谷なる

龍神なり、略註、神名帳に意加美神、社處々見ゆ、

〔萬葉集〕相二藤原夫人奉和歌一首

吾崗之於可美爾、言而令落雪之摧之、彼所爾塵家武、

〔塵袋〕一福ノ神ヲ宇加ト申ス心如何中